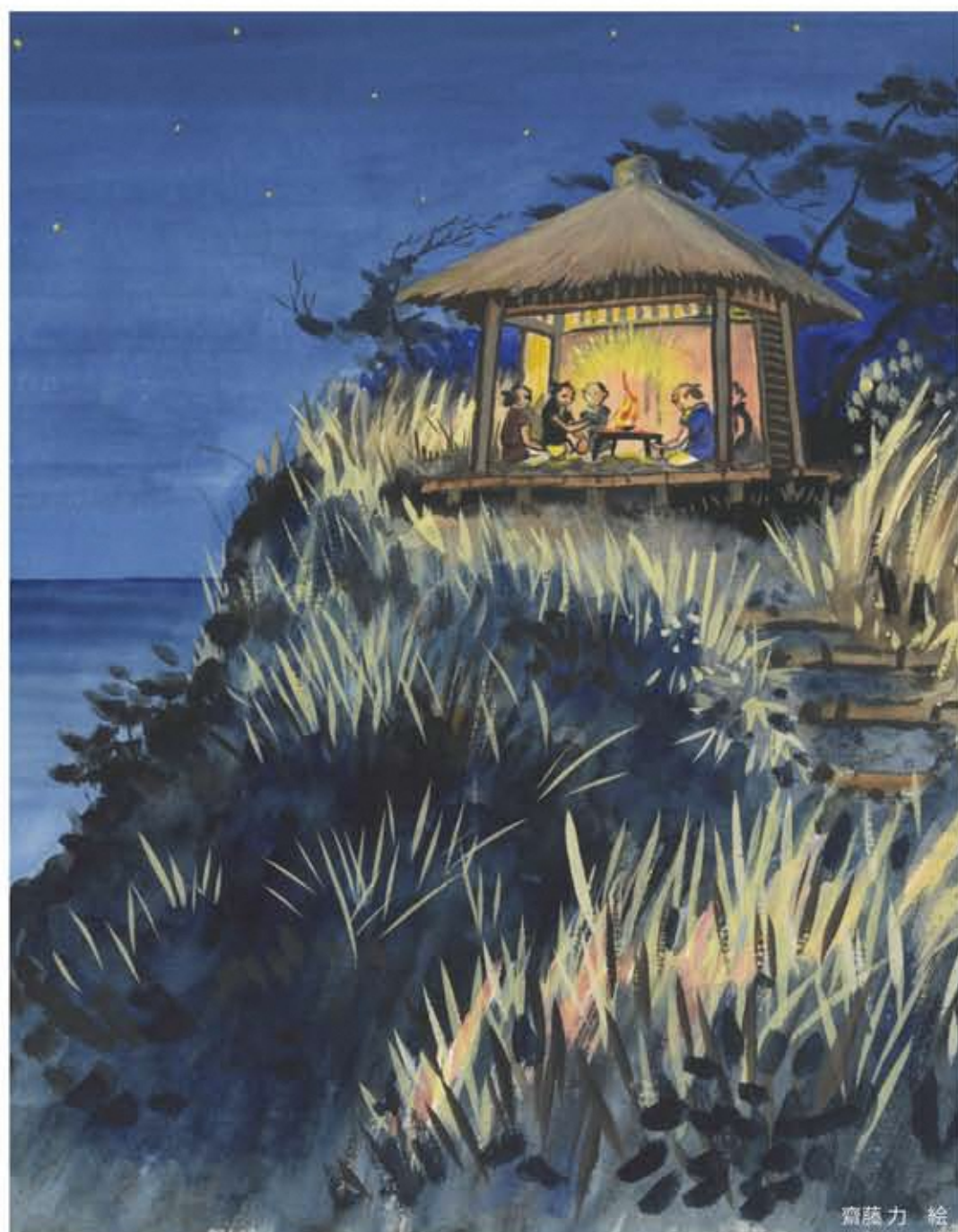


江戸時代の灯台 見尾火灯明堂

みおびとうみょうどう

あんどん

行灯の明かりで236年間活躍



齋藤力 絵

海上交易の発達とともに増える海難事故

戦国の時代が終わり、江戸(東京)という大城下町ができあがると、江戸と上方(大阪)を結ぶ千石船が御前崎沖をたくさん航行するようになりました。

御前崎の岬の東方約3kmの地点には、沖御前(おきごぜん)と呼ばれる暗礁群があり、古来より船が座礁し、「海の難所」として船人たちに恐れられていました。このため、江戸幕府は、寛永12年(1635)三代將軍家光の時代に、見尾火灯明堂を設置しました。

あんどんの明かりで236年間活躍

灯明堂は、高さ8尺5寸(約2.6m)、縦横2間(3.6m)四方の台輪建てのお堂で、屋根は板葺き、下床には建物が強風によって吹き飛ばされないように3尺(90cm)の厚さに石が敷き詰めてあったといわれています。

行灯は、前と両横の三方を4尺(1.2m)四方の格子造りで、障子紙を貼り、後は羽目板張りでした。

この中に灯油3合(541cc)入りの青銅製の皿を入れ、灯芯に火をつけ、村人が二人一組になって、一夜中、火の番をしていたといわれています。

この灯明堂は、明治4年まで、実に236年という長い間、御前崎の海を守り続けてきました。



原寸復元された灯明堂

「見尾火灯明堂」の名前の由来

なぜ、「見尾火」と称したかについての文献は残されていませんが、我が国には古来から「水(み)尾(お)津(つ)串(くし)」という川や海の中で船の航路を示す杭がありました。このことから、火を点して目印としたものを「見尾火」と転訛して称したものと考えられています。

享保3年(1718)の灯明堂絵図



享保元年(1716) 見尾火灯明堂建替御普請積帳



宝暦8年(1758)の地頭方村差出帳によると、見尾火灯明堂は、寛永12年(1635)に幕府の役人石川六左衛門と能瀬小十郎が全国を巡検された時、御前崎を訪れて、灯明堂建設を指示したと記されています。